

小学校体育科の学習指導におけるメンター制の在り方についての一考察

－ 研修資料を用いた情報交換の実践を通して－

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 篠原健真

実習責任教員 松井敦典

実習指導教員 南 隆尚

キーワード: メンター制, 研修資料, 小学校体育科

I 緒言

徳島県では、教職員の大量退職・大量採用の時代を迎え、教職に関する知識、指導技術等の計画的・継続的な継承を目指し、平成31年1月徳島型メンター制度実施マニュアルが作成された。徳島型メンター制度では、メンター(先輩)とメンティ(後輩)で組織されたメンターチームで、メンターリーダーを中心に研修を進め、管理職やベテラン教員等がチームを支える体制を基本としている。この制度のメリットのひとつとして若手教員を指導することで、指導者側も自身の知識や教育技術を整理したり、学び直したりする良い機会になることが期待されている。2019年に筆者が体験した徳島メンター型研修では、メンバー内での情報交換や先輩教員からの教育技術の伝承など、様々な効果が得られた一方で、研修内容の選定や時間の確保について課題が残った。

2021年4月からの教科教育実践フィールドワークでは、小学校体育科のメンターとして置籍校の教員と関わることになった。その中で、体育の授業を充実させるための具体的なサポートの行い方について、新たな課題も生まれた。体育の授業を充実させるために必要な情報や、そのための研修システムと運用について検討し、実践を通して明らかになった成果課題をまとめることを本実践の課題とした。

II 研究内容

体育の授業を充実させるためには当然のことながら授業の準備が必要になるが、それぞれの種目の教師自身の運動経験や得手不得手に左右され教材研究や授業準備がうまく進まないことが多い。また、そのことが授業をする教師の自信や不安感につながっていることが置籍校の教員への聞き取りでわかった。学習指導要領において体育科の内容は、運動領域ごとに示されていることから、前述のようにそれぞれの運動種目と教師の関係が授業の指導に影響を与える。しかし、体育科の内容構成に目を向けると各運動領域の専門性と理論の専門性の相互関係の中で体育・保健体育科が成立していることがわかる。各運動領域の専門性は、指導経験や自身の運動経験によって高めることができるが、体育の理論については、中高教員免許(保健体育)の必修科目の内容を学ぶ機会がなければ専門性を高めることが難しい。そして、体育専門の理論は各運動領域に共通している汎用的な知識であることから、それらを学び各運動領域と関連させることで体育の専門性を高め、授業の充実につなげることができる。本実践では、この体育専門の理論を軸とし、メンティとともに学ぶことを通して、教科(体育)のメンター制研修のあり方を検討する。

III メンター制研修の計画

対象及び、期間、方法は次の通りである。

1. 対象

教職経験年数 8 年以下で、体育科の授業を担当している教員

2. 期間

2021 年 6 月～12 月（8 月を除く）

3. 方法

月に 1～2 回程度（全 9 回）、研修資料を作成し、対象教員に配布する。資料購読後 Google フォームを用いて、感想及び日々の授業実践についての質問や相談等を入力してもらう。感想・質問に対して個別に文書で返答し、意見交換をする。

IV 各実践の内容と考察

1. 研修資料 2「水泳指導について②」を例に

第 1 回の研修「水泳指導①」の続編として「もぐる・浮く運動に重要な浮力」と「進むための推進力と抵抗」について取り扱った。

「もぐる・浮く運動に重要な浮力」では、呼吸をうまく利用することで自分自身の浮力をコントロールすることができること、浮力を十分に得ることや安定した水平浮き身姿勢をとるための姿勢についてのメカニズムを説明した。「進むための推進力と抵抗」では、水中で進むための力を生み出す動作と、進むことによって生じる抵抗をできるだけ受けない姿勢をとることが技能のポイントであることを説明した。この研修資料で主に関連づけたのは体育専門のバイオメカニクスの知識である。この資料に対する先生の感想・質問例と筆者の返答については次の通りである。

1.1 メンターの感想・質問(例) 先生 D

- 人が肺に空気をためて浮力をコントロールできると初めて知った。考えたこと

がなかったので面白いと思った。

- 授業では、泳ぐときの姿勢を「何となく」指導してしまっていた。浮くことが十分でない状態の子に泳ぐ練習をさせるのではなく、頭の位置に気をつけて浮く練習をしっかりと指導していきたい。
- 進むことについては、バタ足だけでも進むスピードが全然違っていたので、姿勢が大切なのだとよく分かった。

1.2 筆者の返答(概要)

メンティの先生が、授業中の具体的な子どもの姿を思い浮かべ、バイオメカニクスの視点に気付いていることがわかったため、運動の出来栄を評価するとき、人間の身体や水を物理的な視点でとらえ、さらに運動もその視点で捉えるバイオメカニクスの考え方について伝えた。そして、運動全般をバイオメカニクスの視点でみることを促した。

2. 実践における考察

研修資料 2 は運動領域(水泳)と体育専門の理論(バイオメカニクス)の関係について研修資料を作成した例である。その他のテーマについても、体育専門の理論と学校における「体育」に関するテーマを関連づけた。

V 成果と課題

今回の実践を通して、メンティの授業に対する考え方や課題意識を知ることができた。研修内容の選定や、研修時間の確保には課題が残った。体育専門の理論と運動領域の関係について研究を継続する必要がある。

VI まとめ

小学校高学年の教科担任制に伴い体育もより専門性が求められる。校内や中学校区の教員でチームをつくってリーダーを中心に教科の専門性を高める研修を行うなどの方策が期待される。